

湯浅さんは、まず「敬遠」について述べています。「敬遠」ということばは、「意識高い」という言葉の用法によく表れていると例えます。「意識高い」とは、外国人留学生が増えた大学で、留学生と積極的に交流しようとする学生や、学外の人脈を積極的に広げよう、政治や社会の課題に積極的に向き合おうとする学生を形容する言葉として使われる。意識が高いのと低いとの、どちらが良いかと言えば、高いほうがいいに決まっているので、「意識高い」は、褒めた言葉、敬った言葉であることを確認してから、実際の使われ方を示しています。

しかし実際の用法は「うわっ、意識高っ」というように使うというのです。そこには、自分はつきあいたくない、というメッセージが込められているとといいます。「意識高い」は、他人を敬して遠ざけるために使われていることばだということです。

また、同様に「個性的」という言葉についても述べています。多様性礼賛の中では、個性的であることは「良いこと」だといいます。しかし「あの人、個性的すぎる」と言うときには、自分はつきあいたくないという意思表示としても使うことがあります。「みんなちがって、みんないい。(だけど自分はつきあいたくありません)」というのが「敬遠」だということです。

小学校の子どもたちの様子を見ていても同じような言葉を使っている場面に出会うことがあります。特に前者の「意識が高い」という言葉が使われている場面が多いです。例えば、「校長先生、この子は意識が高いから・・・」というように話す子どもがいるからです。しかし、小学生の時の言い方からは、「自分たちは付き合えない」という感覚は伝わってきません。つまり、褒めた状態で終わっているということです。成長していくどこかの過程で「いいカッコしている」という意味が加わっていくのでしょうか。この意味が加わったとき、平均的な人が好かれて、変わっている人は排除されるという感覚が表現されてしまうのではないかと思います。

出る杭は打たれるというような感覚でしょうか。みんなと同じでなければならぬというような感覚がどこかになって、そこからはみ出てはならないという暗黙の了解があるのではないかと思います。

私は、小学校では平均的な子どもたちを育てようとは思っていません。いろいろな個性があり、平均から大きくずれていても良いと思っています。「意識高っ」と言われる子どもが多くなり、そしてそれぞれの分野で活躍してくれれば良いと思うからです。そして「意識高っ」と言われたら、自分のやっていることは間違っていないと逆に意識できるような子どもを育てることができれば良いと思います。ポジティブに考えることができるようにしておくことが重要なのです。

～坂井聡先生の紹介～

((プロフィール))

香川大学教育学部卒業 金沢大学大学院教育学研究科修了、香川大学教育学部附属養護学校など養護学校教諭を経て、現在香川大学教育学部障害児教育コース准教授。1997年には自閉症のコミュニケーション指導で辻村奨励賞受賞。2013年より教授に就任。